

インプラント患者の長期的管理 ～ その現実的対応と未来への提案

村上 齋

愛知県 ソフィアインプラントセンター 所長

ニューヨーク大学歯学部 of Advanced Education Program in Prosthodontics に在学中の 1983 年に初めてオッセオインテグレートドインプラントと出会って以来、現時点で約 35 年以上にわたってインプラント治療にかかわっている。当初は世界中でそうであったように、ブローネマルク博士が確立したシステムに則り、無歯顎患者のみを治療対象としていた。やがてこのタイプのインプラントは部分欠損症例にも応用できることが明らかになると、治療対象となる症例は飛躍的に増えたが、一方で、残存天然歯も含めた治療結果を長期的に維持・管理する必要が生じるようになった。さらには、術式や上部構造に用いる素材も多様化し、その結果、無歯顎症例だけを扱っていた日々とは比べものにならないくらいに治療計画立案上の選択肢が複雑化し、長期的維持・管理を目標とするインプラント治療の難易度は以前よりも高まってきている。

インプラント治療の治療計画立案に当たっては一人ひとりの患者の属性を考慮し、さまざまな角度から合理的で実現可能な計画を提示し、患者の同意と選択にもとづいて治療を実行するわけだが、治療完了後の経過が必ずしも期待通りに推移するとは限らない。特に歯内療法が施された歯や歯周病に罹患した歯が残存している場合には、そのような歯の本数や歯列内での配置によっては長期的管理の観点からのリスクが高まることもある。長期的保存を意図した残存天然歯を短期あるいは中期で喪失すると、多大な時間と費用を必要とする再治療や追加治療を余儀なくされることになりかねない。一方、インプラント補綴に関して頻発するトラブルとして上部構造の素材に由来するものが挙げられるが、多くの場合、これは技術的には比較的容易に対応しうる。ただし、これとて一定の費用を必要とするため、経済的なリスクは回避できない。

では、インプラント治療をできうる限り長期的な成功に導き、患者の長期的な満足を得るためにはどのような点に配慮すればいいのだろうか。歯の欠損様式、残存天然歯の状態、インプラント埋入候補部位の骨量と骨質などが技術的な面からインプラント治療を考える上での重要な検討項目である一方で、現実的な対応という観点からは、患者のインプラント治療に対する理解度そして経済力について、十分に検討する必要がある。そして、場合によっては、すぐにインプラント治療に着手するのではなく、一旦インプラント以外の方法で補綴治療を行った上で、後日、必要に応じてあらためてインプラント治療について再検討するほうが患者、術者双方にとってより満足いく結果をもたらすことになりうる。

本講演では、最初の治療介入後 25 年以上を経過した症例を含めて数例の症例を供覧し、その経年的変化とそれらの変化に対する様々な対応について解説する。また、演者の 35 年あまりの臨床経験から、反省点そして未来のインプラント治療に期待する点について述べる。